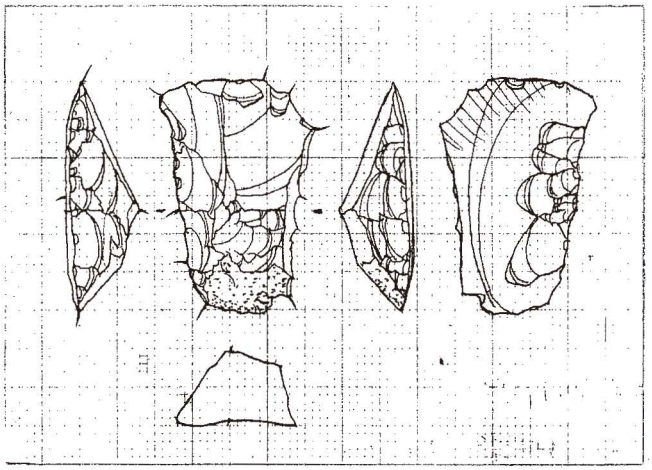
長与町文化財調査報告書　第６集

長与堂崎遺跡



1994

長崎県 長与町教育委員会

長与町文化財調査報告書　第６集

長与堂崎遺跡

1994

長崎県 長与町教育委員会

発刊にあたって

長与町は，長崎市の中心地から北西10kmの地点にあって，東は多良見町に，南東は長崎市，西は時津町に接しています。町の東北に琴の尾岳（451.4m）を含む300m～400mの山岳地があって，西は崎野鼻から南にのびる50～150mの小丘陵が連なり，南は150～400mの山で三方を囲まれ，北は大村湾に面して岬や入江をなしています。

本町には，長与皿山古窯跡をはじめ多くの遺跡がありますが，旧石器時代の遺跡を代表するものに堂崎遺跡があります。堂崎遺跡は，昭和43年～昭和44年にかけて発掘調査が実施され，ようやく古代人の足跡を一部かいま見たところであります。今回の調査報告書は，堂崎線農道整備工事により，予備調査と本調査の２回で緊急発掘調査を実施したものです。その結果，先土器時代の石器，縄文・弥生時代の土器片・石器片が多数出土しました。

今回の報告書が，考古学上の参考資料の一環となり得ますことを望外の喜びとするところであります。

尚，今回の調査及び報告書の発刊にあたりまして，多大なご指導とご協力をいただきました長崎県教育庁文化課に，衷心より感謝の意を表しますとともに，土地所有者及び発掘作業にあたられました皆様にも感謝申し上げ発刊のご挨拶といたします。

平成７年３月

長与町教育委員会

教育長　　徳　永　純　三

例　　言

一　本書は，平成６年度に実施した長与町堂崎線農道整備工事に伴う堂崎遺跡の緊急発掘調査報告書である。

二　調査は長与町教育委員会の依頼を受け，長崎県教育庁文化課が実施し，試掘調査を福田一志・寺田正剛（文化財保護主事）・高原　愛（文化財調査員）が，本調査を福田一志・高原　愛が担当した。

三　本書は，Ⅰ-(1)・(4)，Ⅱ-(1)・(2)・(3)，Ⅲ-(1)・(2)石器Ⅳを福田が，Ⅰ-(2)・(3)，Ⅲ-(2)・(3)を高原が執筆した。

四　出土遺物は，現在長崎県教育委員会が保管している。

五　本書の編集責任は福田による。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに

(1)　調査に至る経緯……1

(2)　遺跡の立地と環境……2

(3)　周辺の遺跡……3

(4)　遺跡の概要……4

Ⅱ　調　　査

(1)　調査の概要……5

(2)　層位……6

(3)　遺物遺存状況……6

Ⅲ　出土遺物

(1)　旧石器時代の遺物……8

(2)　縄文時代の遺物……17

(3)　弥生時代の遺物……18

Ⅳ　ま　と　め……22

挿 図 目 次

第１図　堂崎遺跡位置図……1
第２図　堂崎遺跡周辺の地形と遺跡分布図（２万５千分の１）……2
第３図　昭和44年調査時，出土遺物及び層位……4
第４図　試掘壙配置図……5
第５図　本調査，Ａ・Ｂ地点配置図……5
第６図　Ａ地点，及びＢ地点の層位……7
第７図　旧石器時代の遺物……9
第８図　〃　……10
第９図　〃　……11
第10図　〃　……12
第11図　〃　……13
第12図　〃　……14
第13図　〃　……15
第14図　縄文・弥生の土器……17
第15図　縄文時代の石器……19
第16図　〃　……20
第17図　〃　……21

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景・近景……27
図版２　調査状況及びＡ・Ｂ地点遺物出土状況……28
図版３　Ａ地点土層堆積状況……29
図版４　Ｂ地点土層堆積状況……30
図版５　遺物出土状況……31
図版６　旧石器時代の遺物……32
図版７　〃　……33
図版８　〃　……34
図版９　縄文・弥生時代の土器……35
図版10　縄文時代の石器……36

表　目　次

表１　周辺の遺跡地名表……2

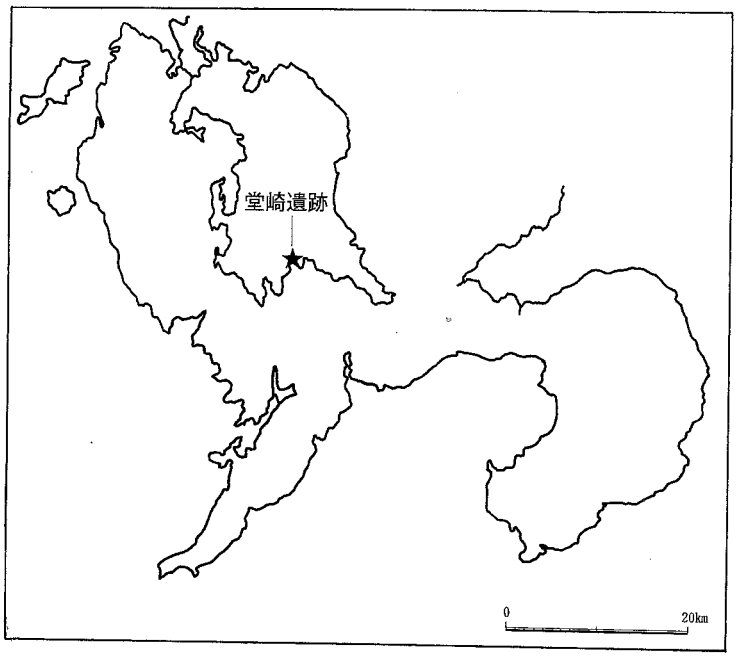
Ⅰ はじめに

(1) 調査に至る経緯

長与町は，平均気温が16.5°Cの温暖な気候を利用し，古くから温州ミカンの生産地として発展してきた町である。全農家の３分の２がミカン農家で，この堂崎地区も緩やかな丘陵上にミカン栽培を行っている。大村湾の南部地域がそうであるように，この堂崎地区も大村湾に突き出した半島上にある。この半島に行くには，国道207号線から半島を縦断する幅約３ｍの農道に進入しなければならない。農作業で車を使う事が多くなった昨今では道路の幅が狭く，夏ともなると半島の突端である堂崎の鼻で海水浴や釣りをする人で賑い，車の離合も難しい状況であった。このことから町では，この農道の拡幅工事である，堂崎線農道改良工事を平成６年度から着工することとなった。もともとこの地は，昭和44年には発掘調査がなされ，旧石器時代を中心とする遺跡であることが知られていた。長与町教育委員会では，この道路建設計画内に，堂崎遺跡が存在することから県教育庁文化課と打合せを行い，平成５年10月13日に路線内の遺跡の取扱いについて現地踏査及び協議を行った。その結果範囲確認調査を平成６年５月11日～５月20日まで実施することとなった。

この確認調査の結果から，２つの地点から遺物包含層が見つかり，この部分について本調査を行うこととなった。本調査の実施については，６月29日～７月13日に行うこととした。

本調査は酷暑のなかで行われた。本調査をおこなった地点は，一箇所は，昭和44年に長崎大学と別府大学が合同調査した地点のそばで，その時と同様に遺物は出土したが，良好な包含層は確認できなかった。もう一箇所でも同じような結果に終わった。但し，遺物については旧石器時代の良好な資料が得られ，この地域の旧石器時代を考える上で重要であることが再確認されることとなった。



第１図　遺跡位置図

(2) 遺跡の立地と環境

堂崎遺跡は，西彼杵郡長与町岡郷堂崎にある。

長与町は，北を静かな内湾大村湾，南を長崎市，東を伊木力ミカンで有名な多良見町，西を時津町に囲まれた，面積28.75㎢，人口３万４千人を数える，長崎市の近郊として発展した町である。町内の地形は，北東には琴ノ尾岳を含む400m級の山岳地と，西は崎野ノ鼻から南に延びる150m級の丘陵が連なり，南は40～150m級の山に囲まれている。河川では，長与川が最も大きく，山々の間に谷を形成しながら町の東から南へ蛇行し，北へ向かい，大村湾に接する長与浦に流れ込んでいる。長与川沿いの谷間の低湿地に田が並び，秋には豊かな実りを与えている。町のほとんどが山岳地で海に面しているため，柑橘園を経営している農家が多く，他は雑木林になっている。町の中心は西方にあって，長与川の中流から下流に位置し，長崎市のベッドタウンは南方に位置している。一方，北東部には上記のように丘陵地帯が広がっているが，その北側の裾野には，海に面して三菱重工業長崎造船所堂崎工場がある。その工場から海岸沿いに北上すると，堂崎遺跡が立地している。

本遺跡は，琴ノ尾岳の北斜面を下った，大村湾南奥の半島，堂崎ノ鼻北部に位置する。この半島は長与町最北端に当たり，東西350～450m，南北約１㎞で大村湾に突出している。海岸は，高さ10m程度の海食崖が発達している。また，半島北部は微高舌状台地になっており，日当たりが良い。地質としては，灰色で緻密な複輝石安山岩から成る。本遺跡から見て東部以北は，多良山系，大村扇状地，長崎空港と大村湾を臨み，西には，大村湾の先に西彼杵半島のなだらかな山々が眺められる景勝の地でもある。半島の先端には観音様が祭られており，そのそばに湧き水が見られる。このことから，本遺跡は日当たりが良く，水に恵まれた場所に立地しているといえよう。

(3) 周辺の遺跡

長与町には，確認されている遺跡が21箇所ある(第２図)。平野に乏しく，丘陵部が多いこともあって，旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く点在し，町内の遺跡の半数以上の13箇所が確認されている。

旧石器時代の遺跡は，本遺跡と泙迫遺跡がある。泙迫遺跡は長与町西辺に位置し，時津町と接した日当たりの良い丘陵上にある。分布調査で，縦長剝片・ナイフ型石器・石鏃・石錐等を表採したが，包含層の遺存は難しい。

縄文時代の遺跡は，３の琴ノ尾岳山頂部に立地する琴ノ尾岳遺跡を除いて長与川流域と長与浦沿岸に集中し，小規模な散布地がほとんどである。昭和44年度の本遺跡発掘時に，満永遺跡・樽津遺跡を分布調査した。双方とも，長与浦を目前にする微高地上に位置する。町内のほとんどの同時代の遺跡がそうであるように包含層は発見できず，石鏃・剝片を表採したにとどまった。６の前田川内洞窟は押型文土器が出土し，縄文早期の遺跡とされている。県内における洞穴遺跡は北部に集中し，長崎県独自の遺跡の立地を示しているが，この遺跡は大村湾南岸で唯一の洞穴遺跡である。遺物は，押型文土器の破片十数点と，スクレイパー・凹み石・剝片・破片のみである。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡については確認されているものはわずかであり，今後の発掘調査に期待するところである。

中世に入り各地で群雄割拠が始まると，大村湾沿岸にも有力者が多数現れ，勢力圏を拡大しようと争うようになり山城が多く建設され，お互いを牽制し合うようになった。長与町は長与氏の勢力下であったが，山城は4箇所確認されている。唾飲（つのみ）城は戦国時代特有の山城で，もともとの名を「浜の城」という。かなりの傾斜をもつ要害の山城で，山頂付近に本丸，中腹に石垣が巡る。地図から欠けてはいるが，屋敷田遺跡の南西約500mに位置する中尾城は，天文年間（1532～55）に長与権之助によって築城されたといわれる。山頂部に位置し，主郭，板築状工法によって築造された土塁と階段状遺構と思われる遺構等が確認されている。中尾城に関しては建築上他の山城と異なる箇所があり，興味深いものとなっている。

中世から近世に変わる頃，長与町は大村氏の勢力下にはいり，寛文7（1667）年嬉里郷皿山に長与焼が生まれた。それを示すのが11の長与皿山古窯址である。その後一時中断したが，正徳2（1712）年に復活し，江戸時代末期まで存続した。波佐見焼と同じく，当時の庶民が使用した「くらわんか茶碗」が多く生産されたが，長与焼の特徴は長与三彩であり，これによって長与焼が有名になったといっても過言ではない。

以上が長与町内に立地する遺跡の概略である。確認されている遺跡が少ないため，今後の発掘調査が期待される。

第2図　周辺の遺跡

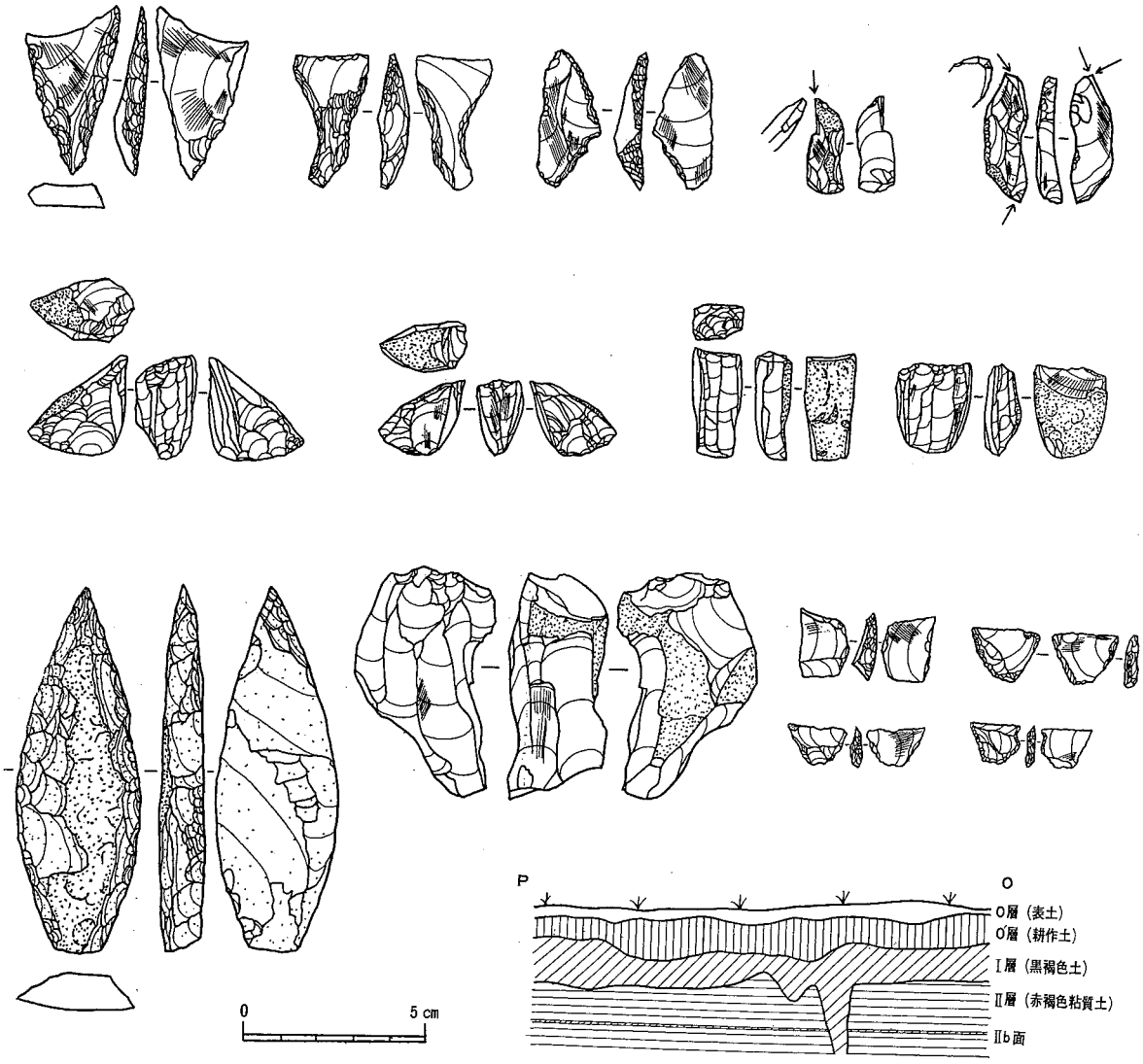
番号	名称	種類	時代
1	堂崎遺跡	散布地	旧石器
2	満永遺跡	〃	縄文
3	琴ノ尾岳遺跡	〃	〃
4	泙迫遺跡	〃	旧石器・縄文
5	樽津遺跡	〃	縄文
6	前田川内遺跡	洞穴	〃
7	白津遺跡	散布地	〃
8	斎藤台地遺跡	〃	〃
9	唾飲城跡	山城	中世
10	山中川遺跡	散布地	縄文
11	長与皿山古窯址	窯跡	近世
12	古園遺跡	散布地	縄文
13	古館ノ逆修碑	逆修碑	中世
14	寺屋敷跡五輪塔群	五輪塔	〃
15	屋敷田遺跡	散布地	縄文
16	並古遺跡	〃	〃
17	横道教会跡	(伝)教会跡	中世
18	洗切陣屋跡	陣屋跡	近世
19	長与隼人之介の弟の墓	古墓	中世
20	平木場の館跡	館跡	〃
21	大堂遺跡	散布地	縄文

表1　周辺の遺跡地名表

(4) 遺跡の概要

堂崎遺跡が，昭和44年に調査されたことは先にも述べたが，そのときの状況について昭和46年刊行の報告書をもとに，簡単にまとめてみたい。

調査区は，A地点とB地点に2箇所に，2×2mあるは2×1mのグリッドを計6箇所設定している。土層は，O，O'層（表土）・I層（硬くしまった黒褐色土層）・II層（赤褐色粘質土層）以下地山となっている。このなかで，遺物包含状況を示したのはII層中の下部で，IIb層として把握されている。但し，実際の調査の中でTOOLの出土は少なく，報告されている遺物のほとんどは，表採遺物である。報告の中でも，土層の状態はあまり良くなく，一部に包含層らしき物があるとされている。表採された遺物は，かなりの量にのぼりそれに対しての考察がなされている。遺物としては，ナイフ形石器・台形様石器・トラピーズ・彫刻刀形石器・尖頭器・細石核・細石刃・石核，等多様である。

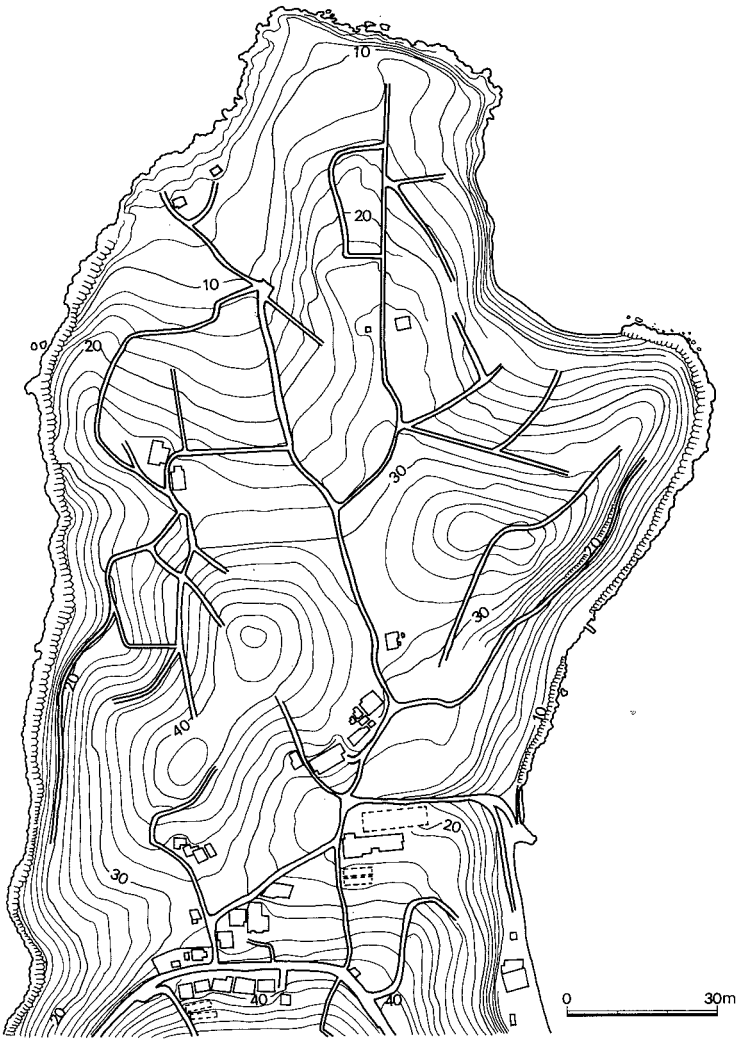


第3図　昭和44年調査時，出土遺物及び土層

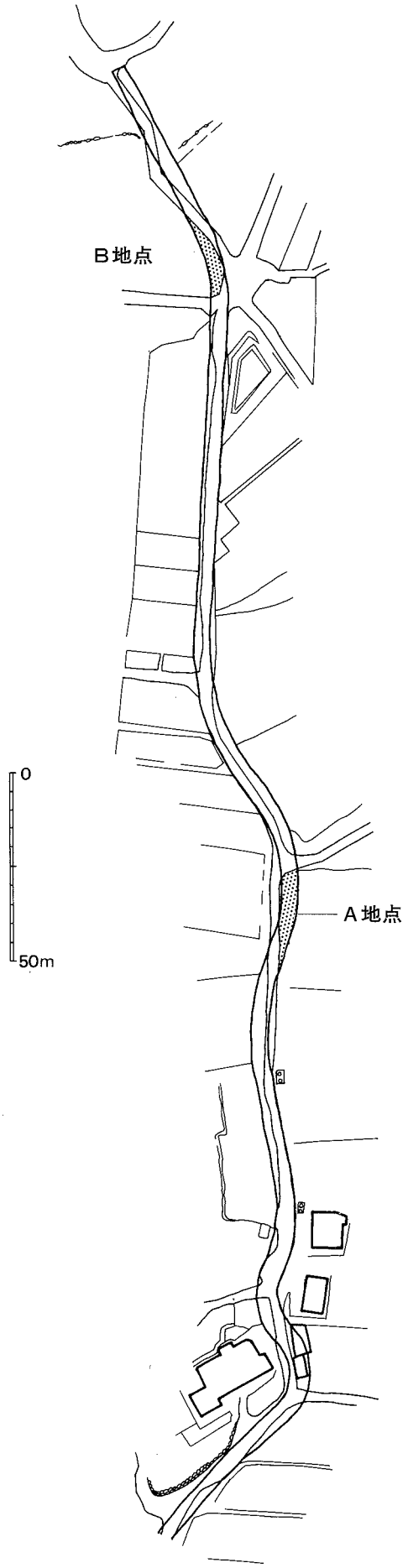
II 調　　査

(1) 調査の概要

まず，平成６年５月11日～５月20日に行った範囲確認調査について触れていくことにする。農道改良が行われるのは，半島を縦断する約170mの区間で，幅約２mのものを４mに拡幅しようという計画であった。この170mの区間に，２×２mの試掘壙を10箇所設定し，設定順にA～Jという試掘壙番号を付けていった。調査の結果，農道のほぼ中央部分にあたるC・J地点試掘壙及び，道路の北側にあたるH地点において遺物を多量に検出することができ，包含層と思われる層位も確認することができた。特に，C・J地点試掘壙付近は，昭和44年に調査がなされているところでもあり，期待されると



第４図　試掘壙配置図



第５図　本調査，A・B地点配置図

ころであった。他の試掘壙については遺物は出土したが，すぐに地山層に到達しミカンの木の根等によって撹乱をうけている状況にあった。C・J地点試掘壙のうちJ試掘壙については，今回の工事については影響ないとのことであったので，本調査はCとH試掘壙の周辺60m²をおこなうこととなった。以上の範囲確認調査の結果を受けて，南側に35m²（A地点），北側に25m²（B地点）の調査区を設定した。A地点では，表土下10cmで土器・石器が出土しはじめ，縄文時代晩期を主体とする文化層が2層において確認された。ただし，細石器が出土する2層下面，台形石器が出土する3層においても土器が出土するなど土層が不安定な所もみられた。B地点については，縄文時代の包含層である2層が既に削平された状況であり，縄文時代の遺物はA地点に比べ少量であった。表土から旧石器時代の遺物である台形石器が6点出土した。B地点の南側では，3層の堆積は厚かったが，北側では地山がすぐに露出する状態であった。

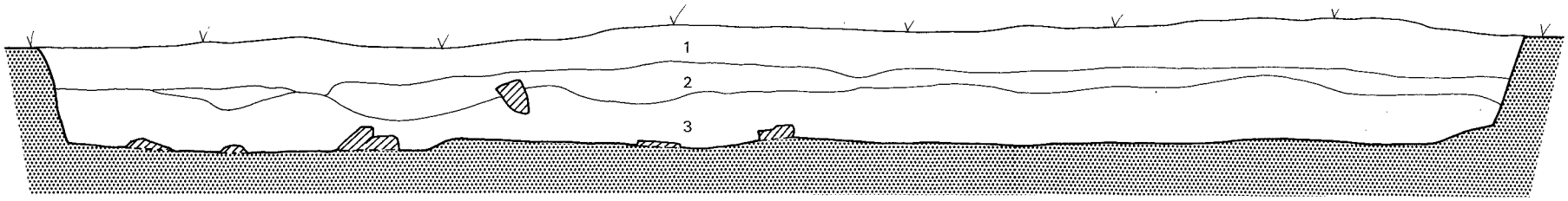
(2) 層　　位

土層は，A地点，B地点ともに基本的には同じで，1層は耕作土，2層は灰褐色粘質土（弥生・縄文・細石器の包含層），3層は明褐色粘質土層で安山岩の風化土層である。3層は上部のフカフカした締まりのない3a層と，下部のやや茶褐色を呈した締まりのある3b層とにわけることができる。但し，遺跡全体から明確に捉えられるものではなく，安定した文化層が捉えられるというわけではない。旧石器時代の遺物は，主に2層下部と3層内から出土する。

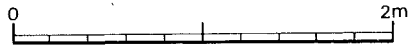
基本的に，長崎県では島原半島以西の土層の堆積状況は，きわめて悪く表土直下は安山岩・玄武岩の風化土である明褐色粘質土で構成されることが多い。この状況は場所によっては，厚い堆積を示しATがある程度捉えられ層位の指標となる場合もあるが，多くの場合数十センチで基盤岩に達し，遺物も撹乱された状況である場合が多い。この堂崎遺跡の場合も，テフラの堆積が不十分であり，その結果旧石器時代の遺物と土器が同じ層位で出土することがしばしば認められる。このことについては遺物の遺存状況のなかで取り扱うとともに，層位については，まとめの項で他の地域との対比を行いながら再度触れていくことにする。

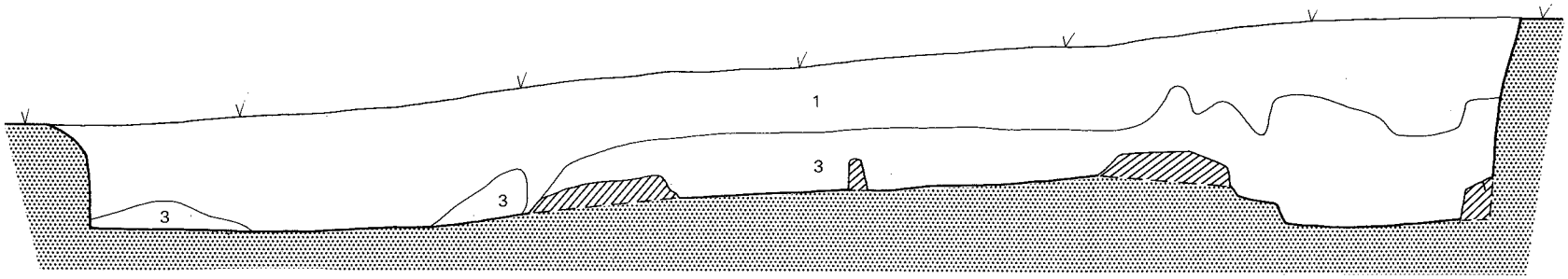
(3) 遺物遺存状況

調査においては，ドットマップを作成し，遺物の広がり及び深度を捉えることから，遺物が本来帰属する層位を確認することを試みたが，分布を見る限りにおいては，平面的に深度的にも集中するような所は認められなかった。全体的に拡散する状況である。遺物そのもの小破片で，摩滅したものが多く本来の器形が復元出来ない状況のものが多い。一つの土器が崩壊した場合，そこを中心に破片が集中する状況が一般的である。この地区においてはその状況さえ確認できないのである。このことについては，いかに土壌の発達が，遺物の保存に影響を与えるかが理解できよう。ドットマップに端的に現れてはこなかったが，調査時の状況からは，ナイフ・台形石器等は，土器出土層準より下層から多く出土する傾向にあることは事実である。

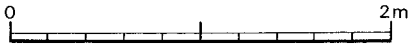


A 地 点





B 地 点



第6図　A地点，及びB地点の層位

Ⅲ　出土遺物

(1)　旧石器時代の遺物

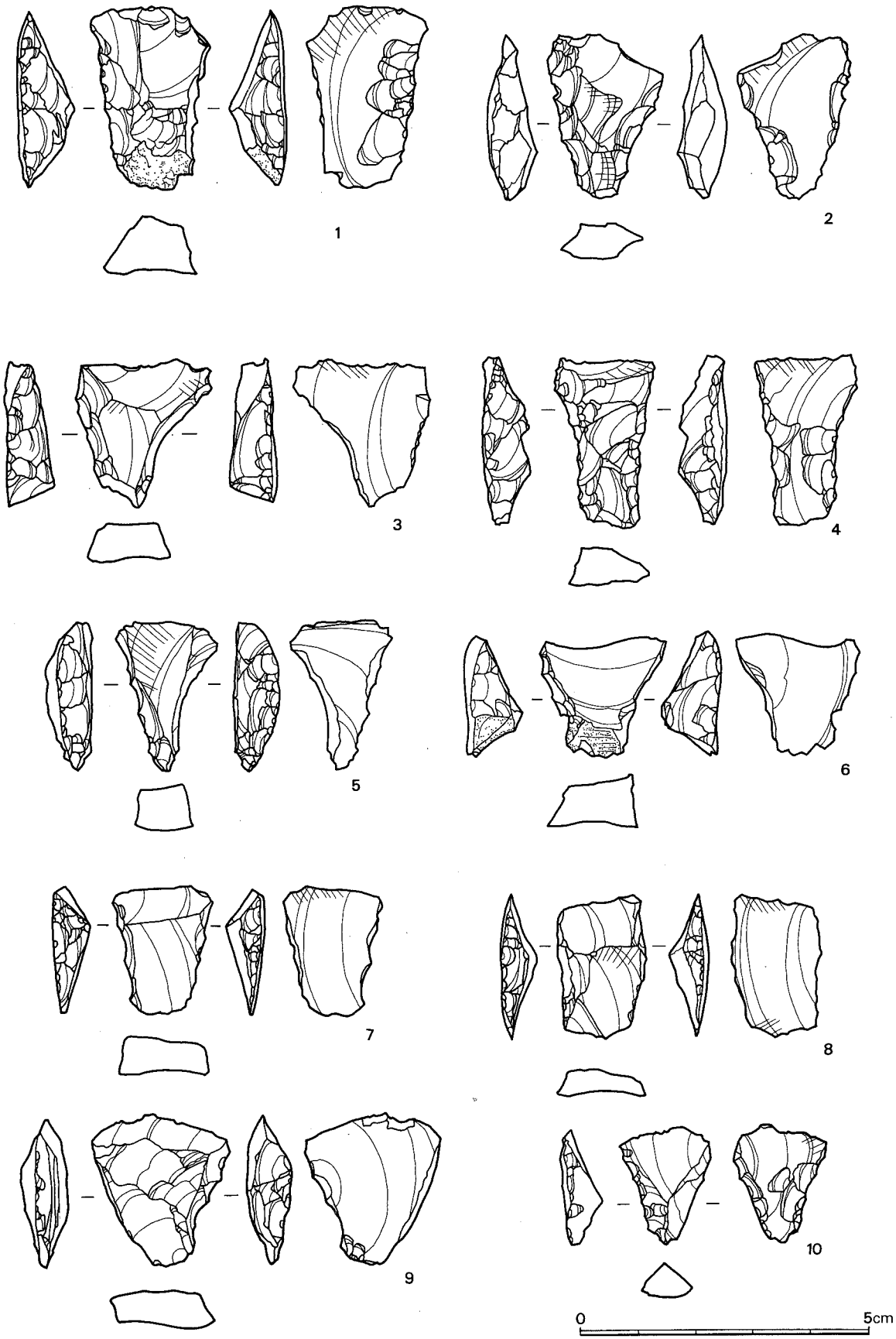
台形石器・ナイフ形石器・石核・三稜尖頭器・細石核・細石刃・スポールなど，器種は多様であるが，ほとんどが表土から出土したものである。

台形石器については，13点中9点が表土から出土している。比較的に大型のものが多く，厚みのある剥片を使用している。7・8・11などは，所謂日ノ岳型といわれるものに近く，他のものと比べ薄身の剥片を使用しており，幅広い縦長剥片を素材として使用している。ある程度発達した剥片剥離技術が要求されたものと考えられ，他の台形石器とは区別しなければならない一群であろう。ブランテイングも細かく丁寧である。1についてもこの範疇に入る可能性が考えられる。他のものについては，技術的に同様なものは看守できない。2や5については分厚い横長剥片が素材として選択されているが，2は平坦剥離によって整形しているのに対し，5は急激な角度からのブランテイングが施されている。7は，一方を切断して微調整を加えて整形している。12は，左側面は正面からブランティングを加えたあとに，ブランティングを打面として正面に平坦剥離を行い，右側面は切断してから切断面を打面として裏面に平坦剥離を加えている。12の例からも切断は，台形石器をつくるうえで有効な技術であったことが考えられる。このような技術は原ノ辻型台形石器を作る際にも利用されているため，原ノ辻型台形石器との関連のなかで捉えることができるのではないだろうか。

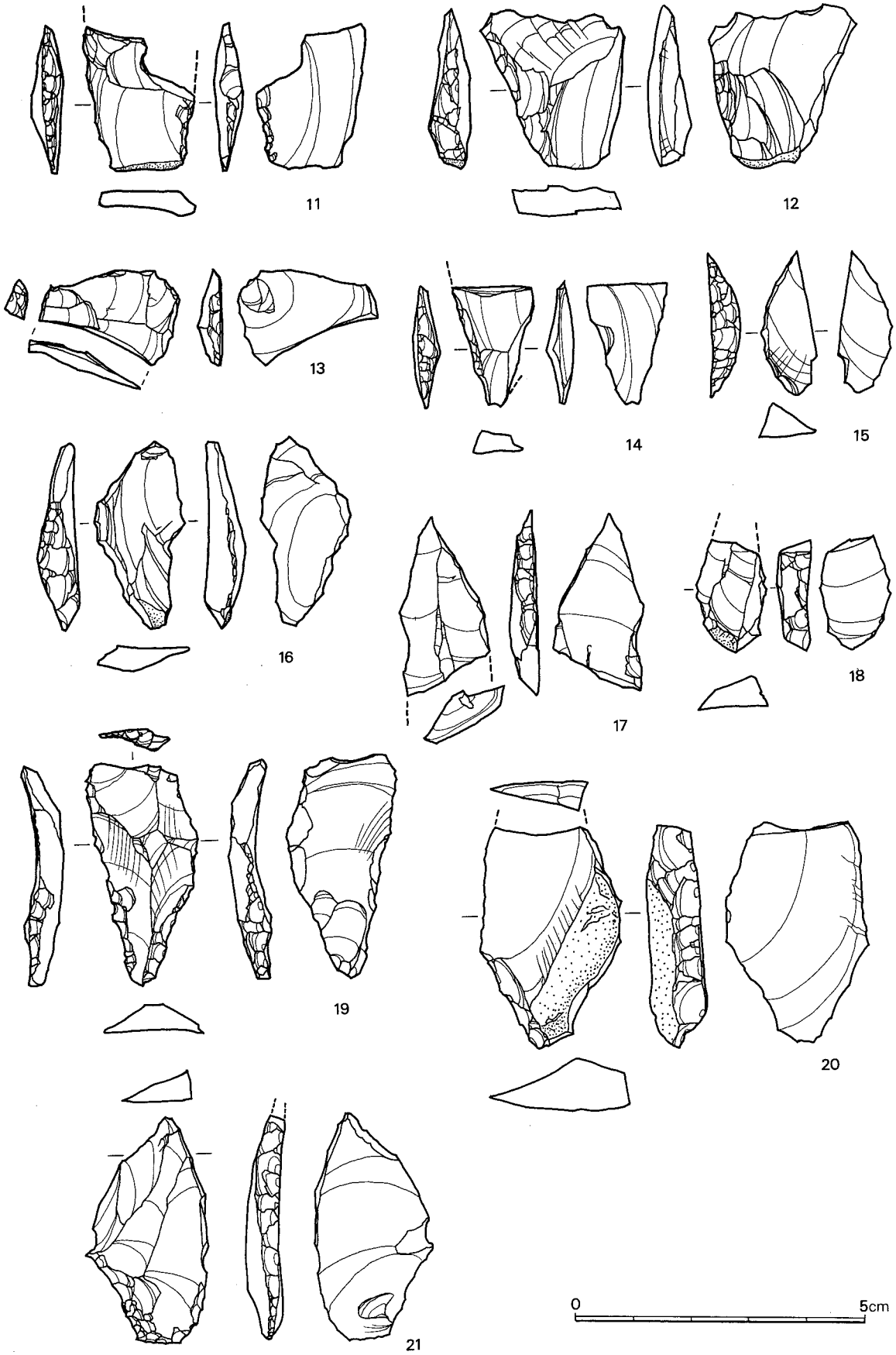
ナイフ形石器は8点出土している。16・18・20の3点がA地点の3層からの出土で，他は表土出土のものである。出土点数が少ないこともあるが，形態・技術について共通のものは見られないようである。21については，表土出土のものであるが，左側片が平坦剥離によって構成され，切り出し状を呈していることに特徴をもつ。

三稜尖頭器は4点出土している。22は角錐状石器としたほうがよいであろうか。分厚い横長剥片を素材とするが，断面は台形を呈し，側辺の加工は間隔をおいて大きな粗い剥離を施すことによって側辺を抉入させている。23・24も側片調整は抉入状の調整だが，断面三角形を呈し，縦長剥片を使用している。

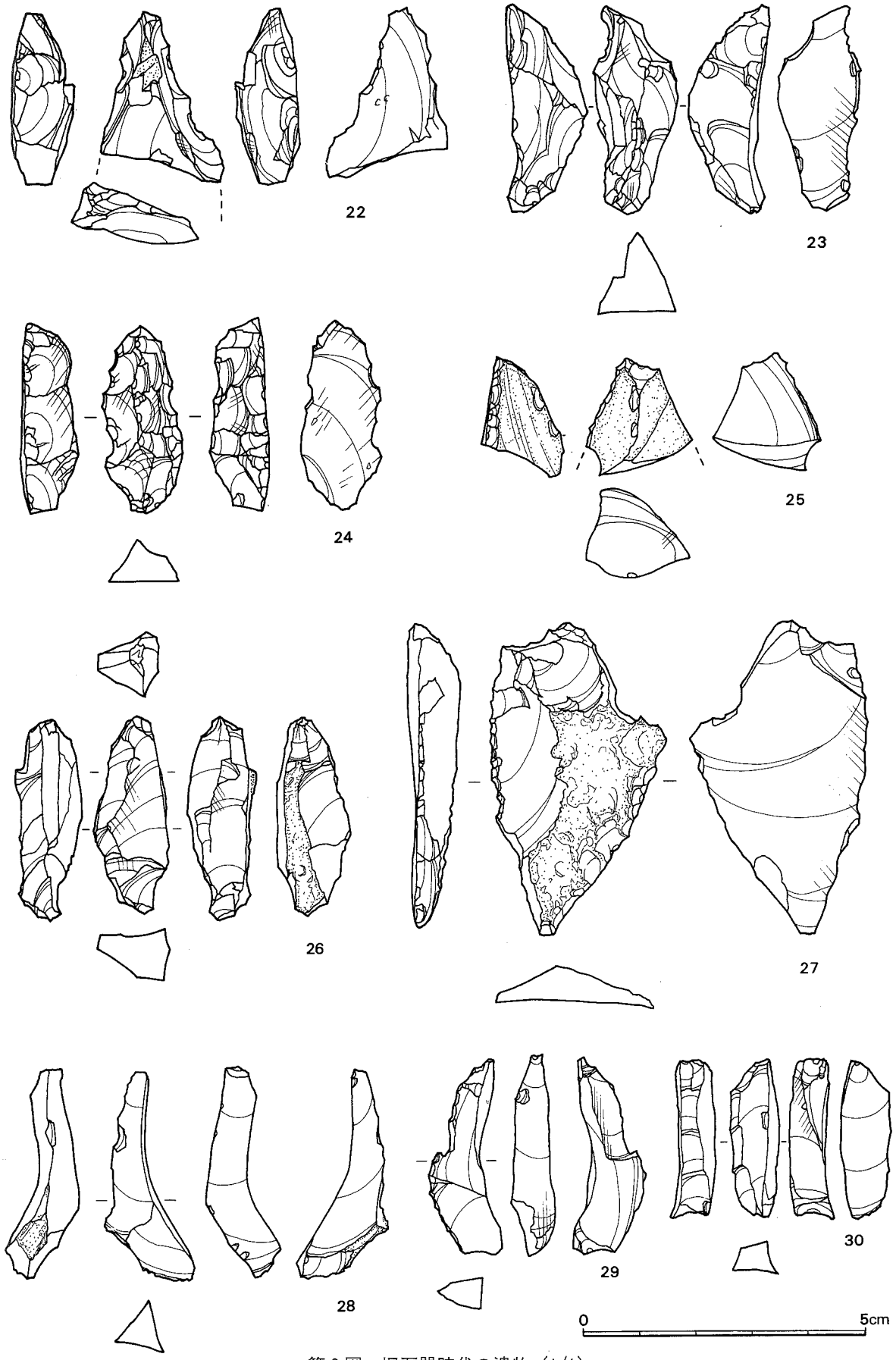
この他に，旧石器時代の石器として，26の楔形石器，27の掻器，28～30のスポールなどがある。石核は5点出土しているが，34を除いてすべて表土出土のものである。31は横長剥片を剥いだ残核であろう。a面に2枚の剥離痕が看守される。円盤状の素材の周辺を加撃して横長剥片を剥離したものと思われ，最終的にはb面の周辺から球心的に剥離を加え廃棄している。この最終的な剥離は，本来目的剥離を剥ぐための打面調整の意味合いがあったものと考える。32は，小型の縦長剥片を剥いだと思われる残核だが，両面に打面を設置してある。最初は下の面に，単設打面を設け剥離をしているが，上手く剥離ができずに反対側の平坦な自然面を打面として剥離を行っている。34は分厚い不定形剥片を素材としており，左側片は切断されている。この素材剥片そのものは，分厚い剥片を剥離する技術の中から作りだされたものである。



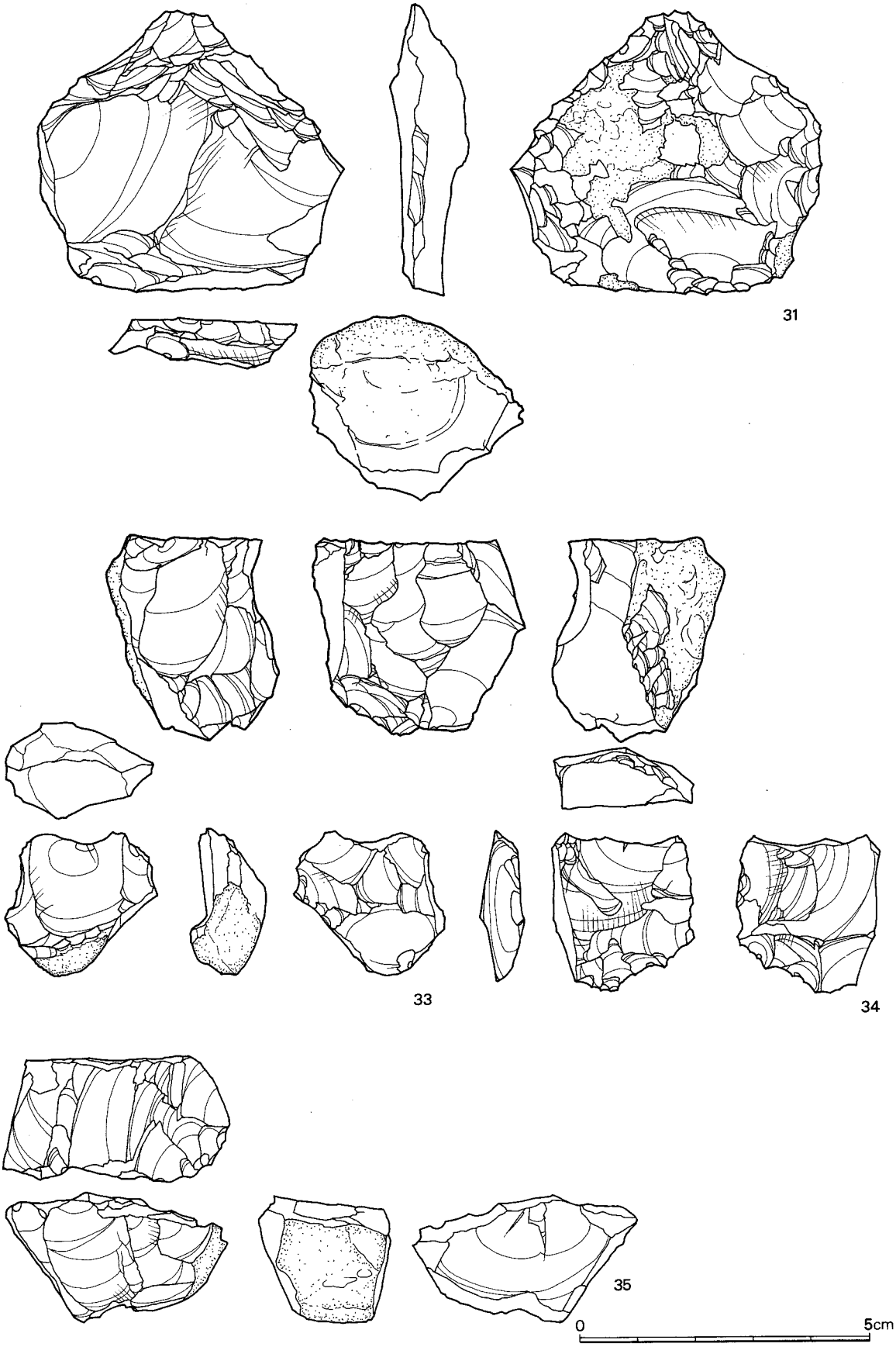
第７図　旧石器時代の遺物（1/1）



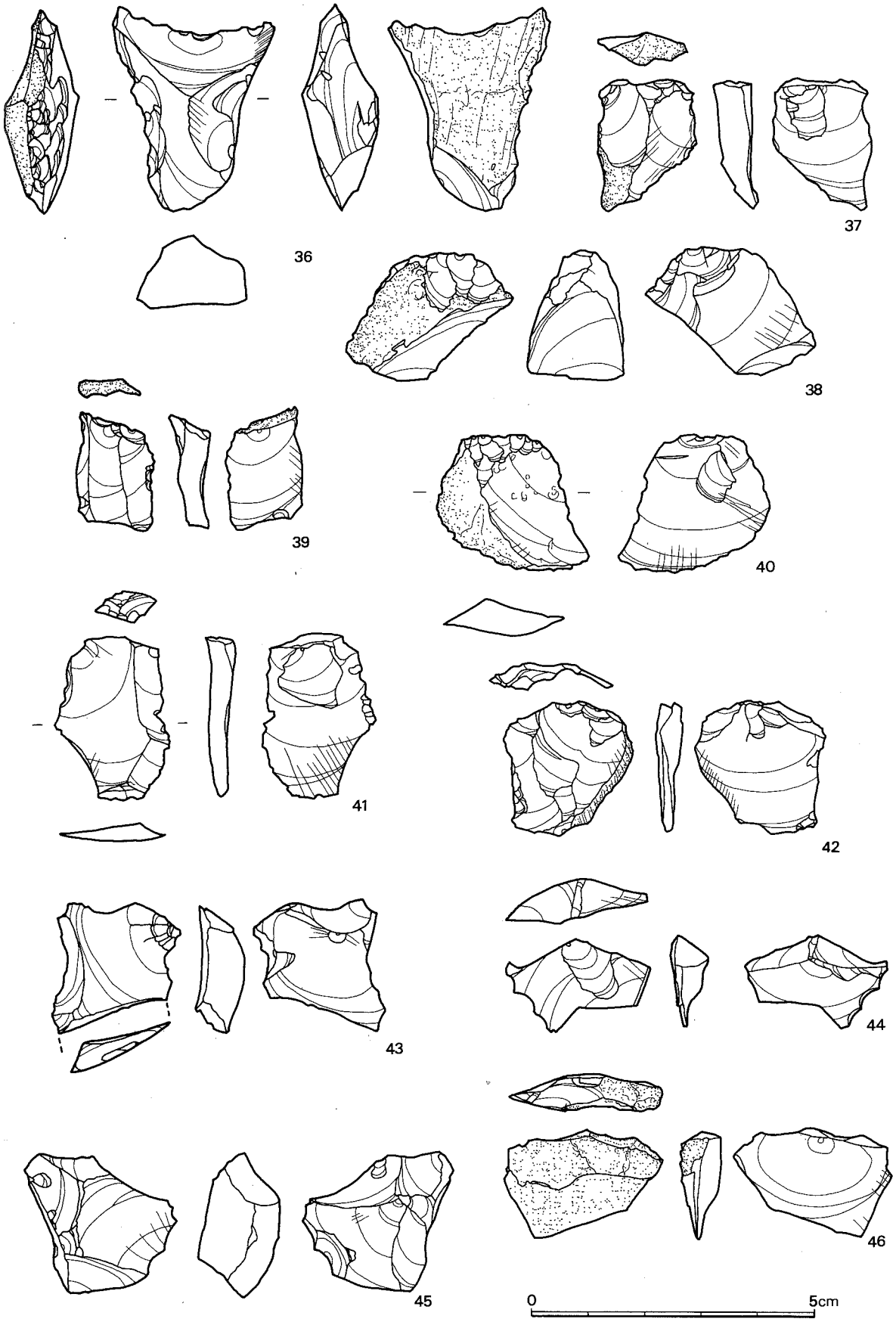
第 8 図　旧石器時代の遺物（1/1）



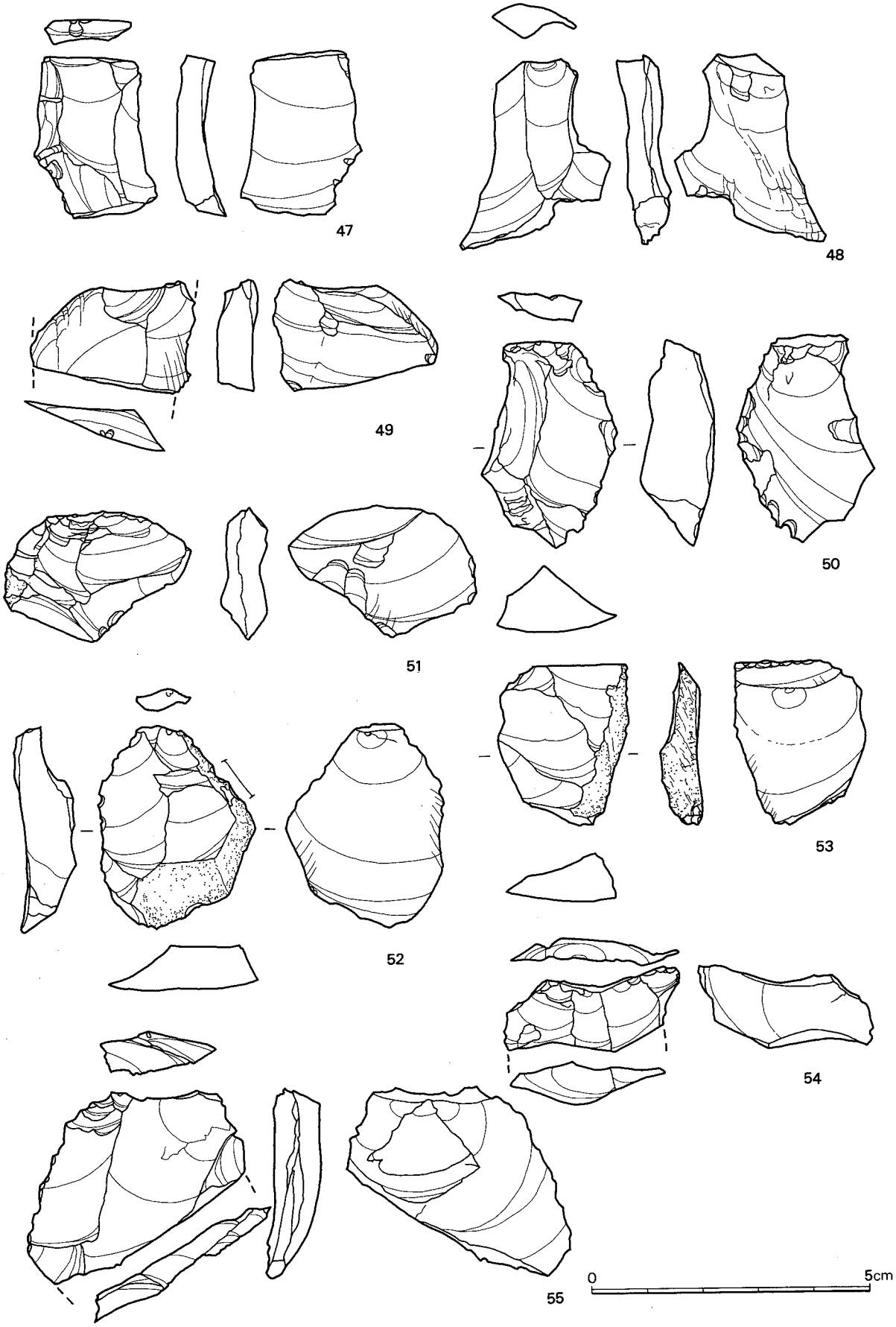
第９図　旧石器時代の遺物（1/1）



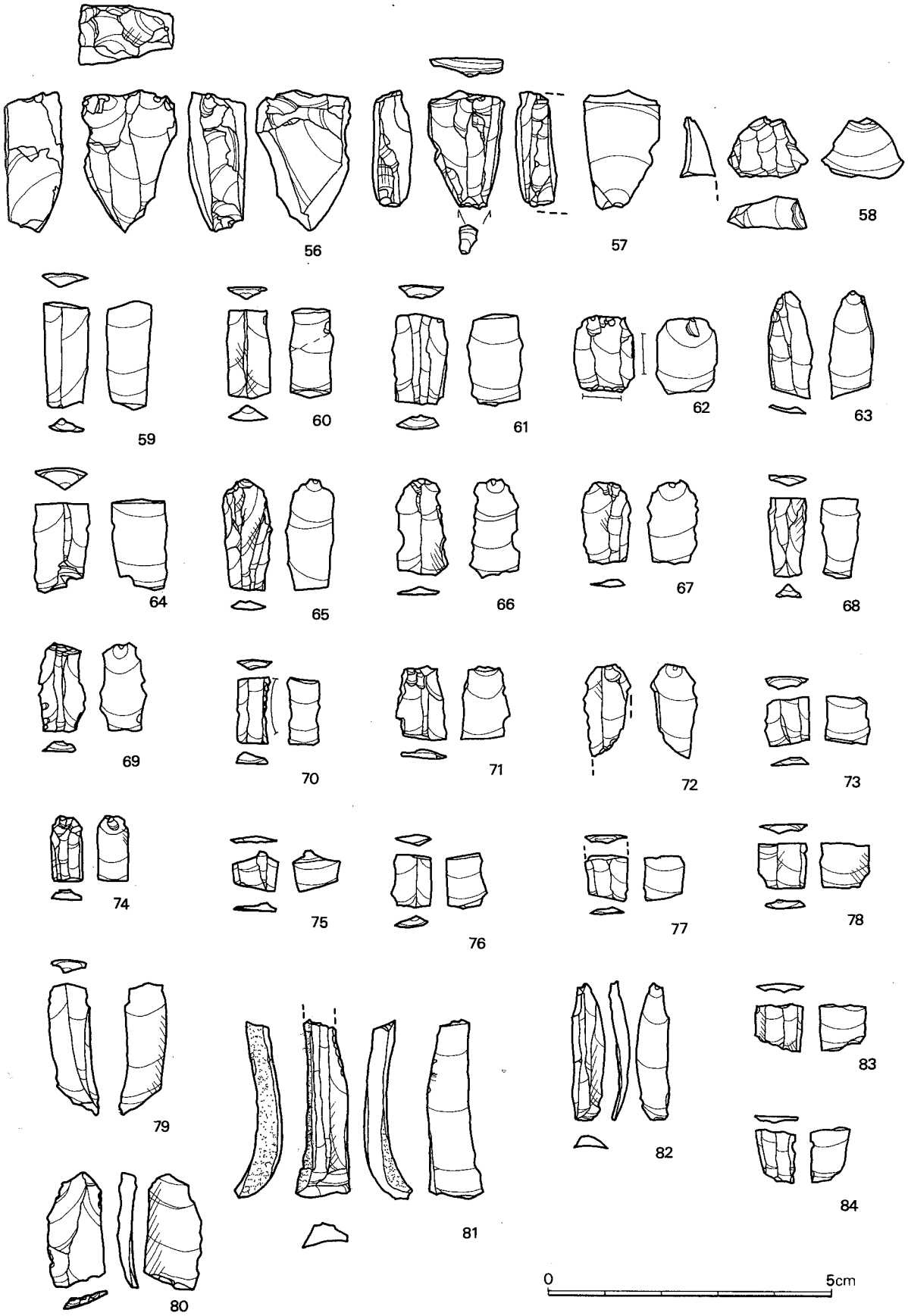
第10図　旧石器時代の遺物（1/1）



第11図　旧石器時代の遺物（1/1）



第12図　旧石器時代の遺物（1/1）



第13図　旧石器時代の遺物（1/1）

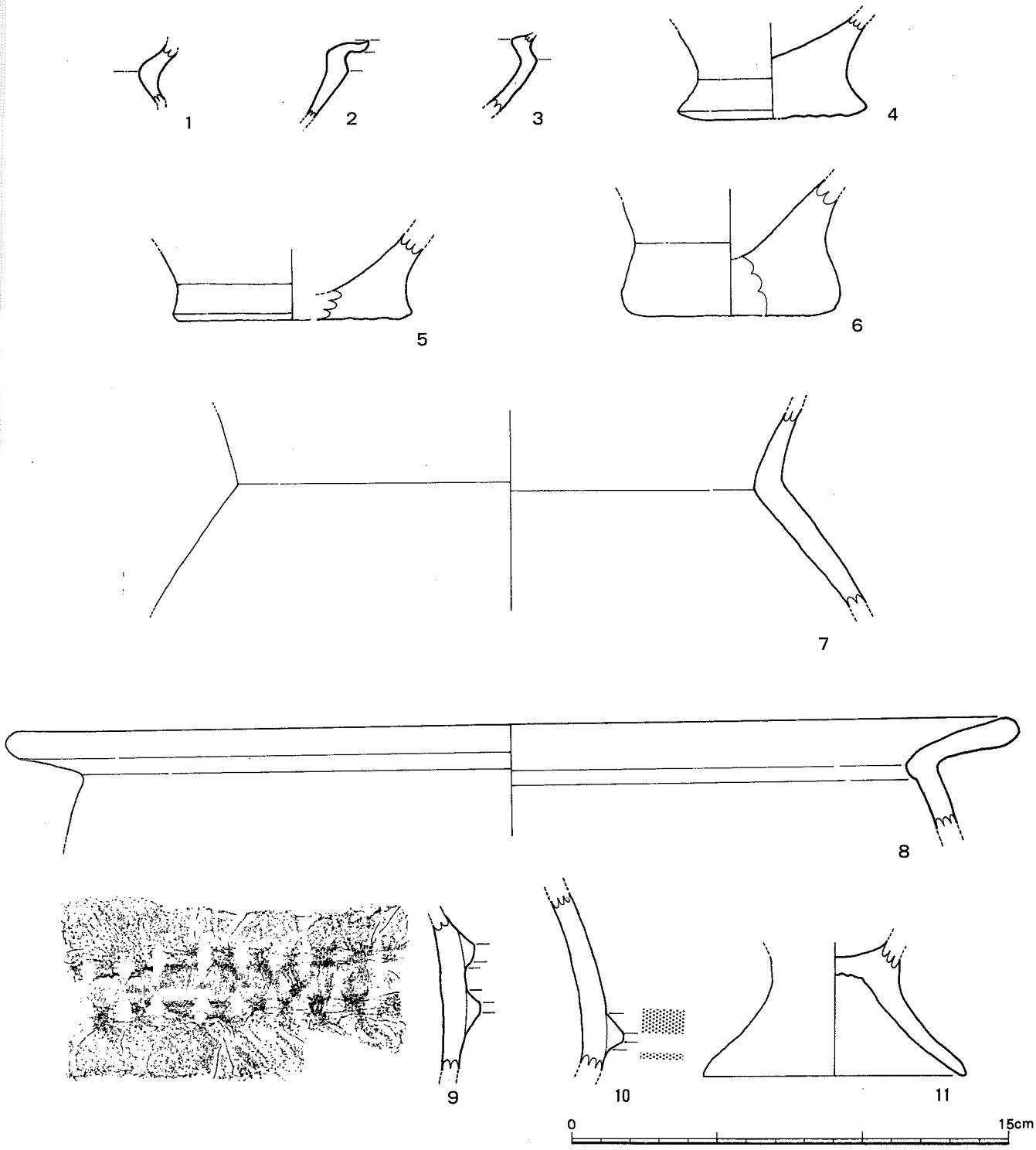
剝片については，縄文時代のものとではパテイナの在り方及び，黒曜岩の材質の違いからおおむね区別することが出来る。36は背面に自然面が付く分厚い剝片であるが，形状は台形石器に近く側片に調整痕もある。43～45については，34の石核に通じるもので打面に特徴をもつものである。すなわち打面にいくつかの剝離痕を有し，その剝離痕は一定の剝離技術に伴うものであり目的剝片を剝いだ稜を意識的に打点として連続的にこの資料のような分厚い剝片を剝ぐものである。他の剝片の資料をみても，積極的な石刃・縦長剝片技法があったとは考えられない。

前回の報告書では，半円錐・半舟底形の細石核が多く掲載されていたが，今回の調査では細石刃は多く出土したが，細石核は3点しか出土していない。56の資料は，打面調整を緻密に行い，正面の剝離面からやや大きめの細石刃が剝離されたものと思われる。全体的に方形を呈し，所謂位牌塔形といわれるものに近いであろう。57は細石核の調整剝片である。調整の仕方として細石核の下端から加撃しているところに特徴がある。その後に彫刻刀として再利用されている。細石刃については，かなり整った資料が多く，全体的に長めで幅広い資料が多いようである。

(2) 縄文時代の遺物

土器（第16図１～６）

表土及び２層からは，縄文時代の晩期を中心とした土器が多く出土している。但し，細片となっている遺物が多く，図面としては６点しか掲載していない。いずれも摩滅してかなり粗い作りであり，刷毛目・底部の様子等が分かりにくくなっている。１～３は，浅鉢の口縁部の破片である。僅かな破



第14図　縄文・弥生の土器（1/2）

片であったので，径は出していない。口縁部の断面が「く」の字形で折れ，いずれも横方向に刷毛目調整が施してあり，屈曲した部分は刷毛目を撫で消した跡がある。山の寺式土器と同時代に位置付けられる。4～6は，甕形土器である。4は横方向に刷毛目調整跡があり，胎土に砂はほとんど含んでいないが結晶片岩を含んでいる。3点とも底部は平坦で，底で広がりをみせ安定している。内壁はナデ調整されていて比較的きれいなカーブを描いている。

石器

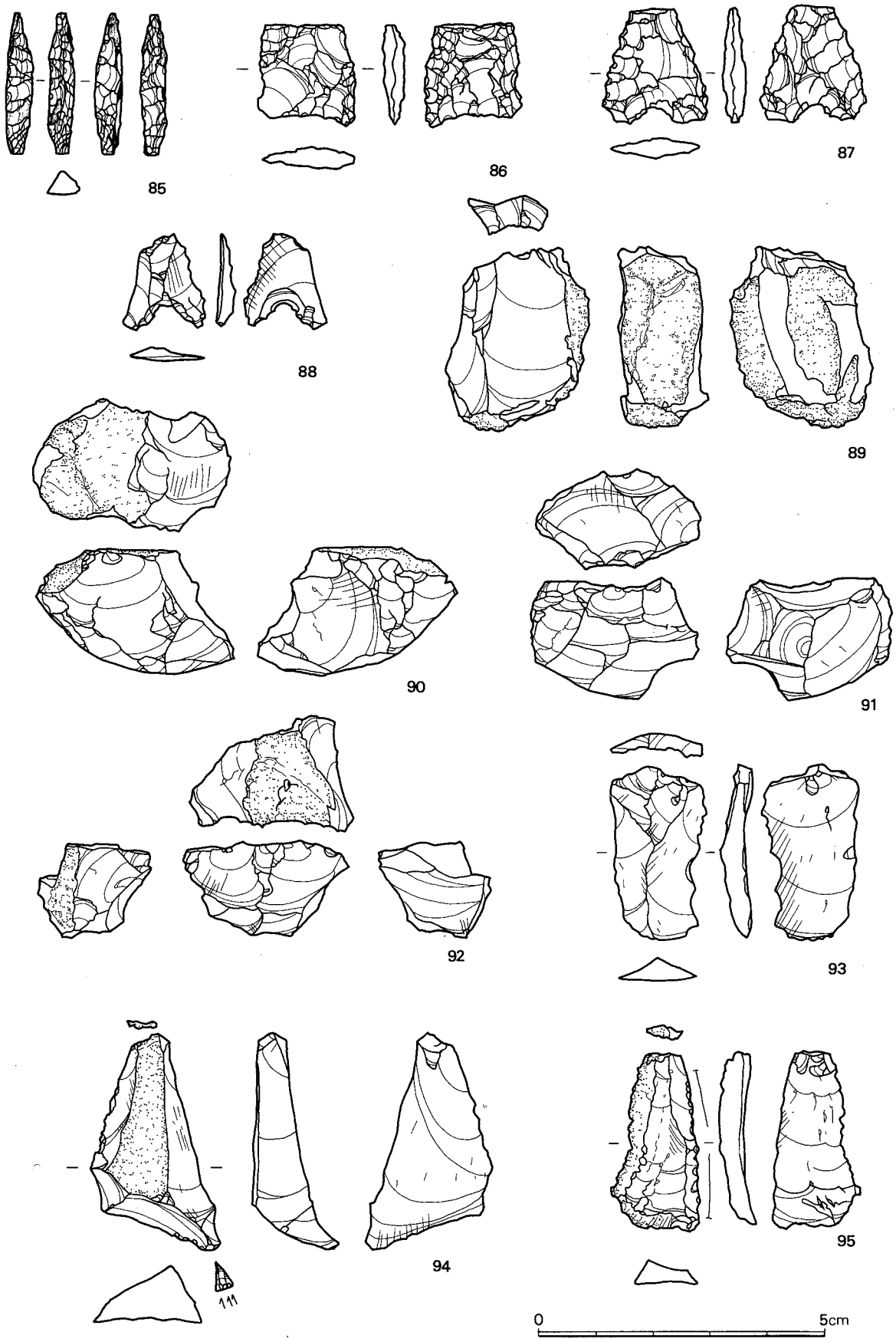
85は良質の黒曜岩を使用した石錐である。断面三角形を呈し，各稜上から緻密な剝離を施している。回転するような使用の結果であろうか，稜上は摩滅している。石核及び剝片については，晩期の特徴を表すものが多く。石核については，多面体で自然面を背面に多く残すのが特徴であり，剝離面そのものは大きくない。剝片についても同様で，打面及び側面に自然面を多く残す。石材についても，不純物を混入する黒曜岩を多く使う傾向にあり，旧石器時代の遺物の素材とは大きく異なる。このことについては，大村市の黒丸遺跡や西海町のケイマンゴー遺跡の分析結果とも酷似する。また，晩期の特徴である打製石斧の出土とも併せて，縄文時代のなかでも中心は晩期にあることが再確認できた。

104～111は石斧類であるが，104と105は遺跡南側での表採資料で，2点ともに全体に磨きを入れたものである。104は，一方からの磨きが強く片刃状に整形していることが特徴である。105は，蛇紋岩を素材とするが，質が悪く所々に虫食い状に穴が見られる。全体的に研磨しているが，特に刃部付近は丹念に仕上げている。106～111は，打製石斧を中心とする一群である。素材は，輝石安山岩を使用しており付近で一般的に手に入れることのできる素材を使用している。

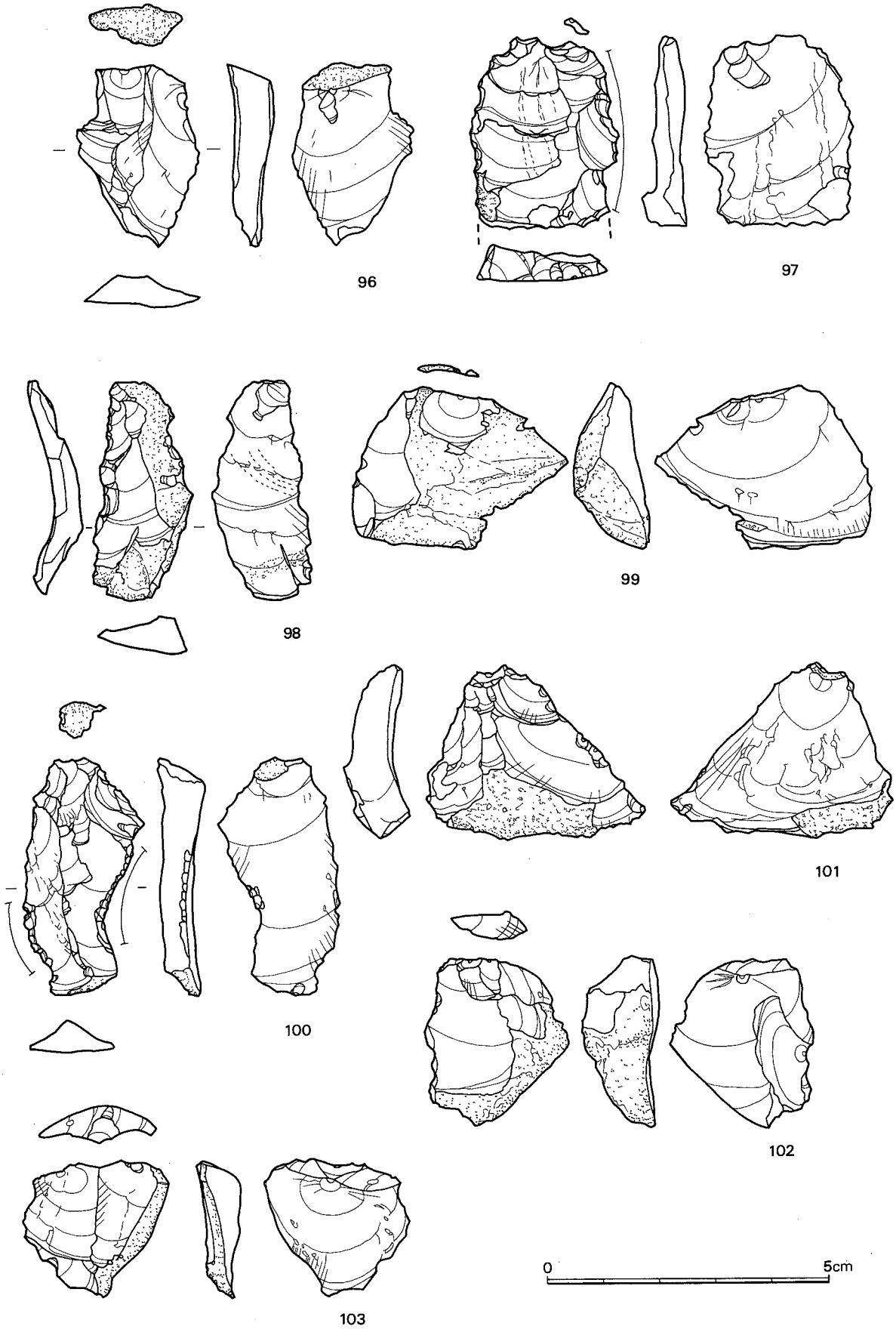
(3) 弥生時代の遺物（第18図7～11）

全て土器である。やはり，いずれもローリングがひどく，器面の状態に不明な点が多い。7は壺形土器である。口縁部と胴部の境に刷毛目調整痕が見られる。色調は薄い赤褐色で焼成はしっかりしている。8は，甕形土器の口縁部である。「く」の字形口縁で口唇部が若干膨らみ，頸部の内壁部分がはっきりと屈曲しており，中期の須玖Ⅱ式に類似した形である。9は，刻目突帯のある中期の壺の破片である。突帯は台形状で鋭さがなく，刻目は不等間隔で突帯2本同時に粗く刻まれている。また，刻目の右側より左側の方が勾配が急であるため，制作者は左から右へ刻目を付けたと思われる。10は，突帯部に朱を塗付した壺の胴部である。僅かな破片であるため，突帯が実際壺のどの部分を巡っていたかは不明である。焼成は良好で，色調は薄い赤褐色である。11は，脚付甕の底部である。ローリングで端部の形態は不明である。焼成は良好で，色調は黄褐色である。

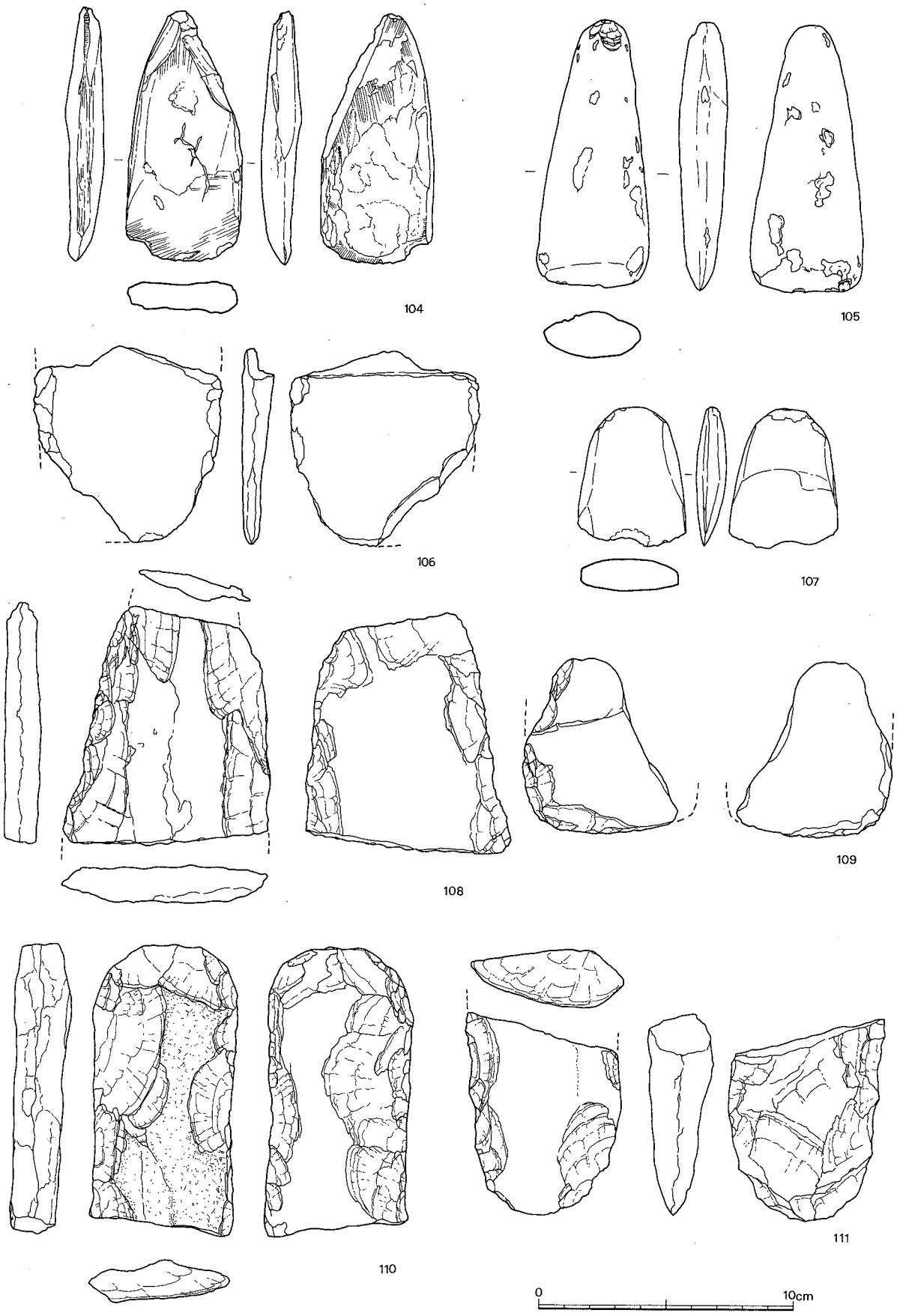
山崎　純男ほか　『縄文時代の研究』4　雄山閣
吉田　政隆　百人委員会　1970　「山の寺梶木遺跡」
長崎県教育委員会　1980　「ケイマンゴー遺跡」
稲富　和裕ほか　大村市教育委員会　1980　「黒丸遺跡」
武末　純一　『弥生時代の研究』4　雄山閣



第15図　縄文時代の石器（1/1）



第16図　縄文時代の石器（1/1）



第17図　縄文時代の石器（1/3）

Ⅳ　ま　と　め

本遺跡では良好な包含層は認められなかったが，一つの傾向として２層を中心に縄文時代晩期の遺物が，２層下層（３層との漸位層）に細石器，３層にナイフ型石器の文化層が存在する可能性は示唆できるものと思われる。現実的には，３層まで縄文時代の土器や石器が混じる状態であったが，３層が安山岩の風化土であることから３層の土器等は，混入と考えたほうが妥当と考えられよう。

長崎県では島原半島，特に百花台遺跡周辺以外の地域ではテフラの発達が貧弱で，安山岩及び玄武岩の風化土で構成され，その堆積も薄いというのが現状である。その結果古い所産である風化土中に新旧の遺物が混在するという遺跡が多いのである。長崎県の旧石器研究はこれらの現状を踏まえ，技術的，形態的な面から石器研究が推し進められてきた。その中において，田平町の日ノ岳遺跡の調査は２層・３層における台形石器の変遷，平戸の中山遺跡におけるナイフ型石器群の研究は，九州の旧石器研究の指針を示すこととなり，現在においてもその評価は多大なものがある。またその後，テフラの確認もなされ，県内でもやや古い時期の石器群の研究もなされるようになった。

これらの研究の成果を鑑み，本遺跡の石器群をどのように位置付けたらよいかであるが，一つには日ノ岳型台形石器が多量に出土したことを取り上げなければならないであろう。また数的には少量であるが原ノ辻型を意図した台形石器の出土，やや崩れた形の三稜尖頭器など新旧混在した様相もみせている。ただし，百花台型の台形石器が出土していないことは大きな意味をもつものと考えられる。

今の段階ではこれらの遺物をどのように把握するかは，難しいところであるが，今後のテフラの発達した遺跡での研究と，技術・形態学をあわせた研究が本遺跡の石器群を解明する必要不可欠な条件となってくるであろう。

縄文時代の遺物については，晩期を中心としており，石器においても扁平打製石斧が出土するなどこの地方における一般的な晩期の様相をしめしている。石鏃でみるならば，剝片鏃が１点出土しているが，剝片を見た場合，縄文後期中葉ごろにピークをもつといわれる縦長剝片の出土はなく，自然面を多く残す縦長剝片に取って変わっているようである。また，北九州で縄文後期中葉から出土し初めるという扁平打製石斧は，西北九州では幾分出現時期が思われ，また遅くまで残る可能性も推測できるようである。一つには扁平打製石斧が東から伝播したとする説から考えると，西北九州には北九州に比べややおくれる可能性が指摘でき，実際に長崎では後期中葉における扁平打製石斧の出土は筆者の知るところでは知られていない。後期後葉に国見町筏遺跡において出土するのが所見であろう。扁平打製石斧は農耕との関連性が指摘されており，続く弥生とも考え併せて大きな問題をもつ石器として今後再認識する必要があるであろう。

参 考 文 献

1．下川達弥ほか　1981　「日ノ岳遺跡」　長崎県立美術博物館

2．萩原博文　1977　「平戸市の文化財」8　―中山遺跡―　平戸市教育委員会

3．吉留秀敏　1993　「古文化談叢」30　―縄文時代後期から晩期の石器技術総体の変化とその評価―

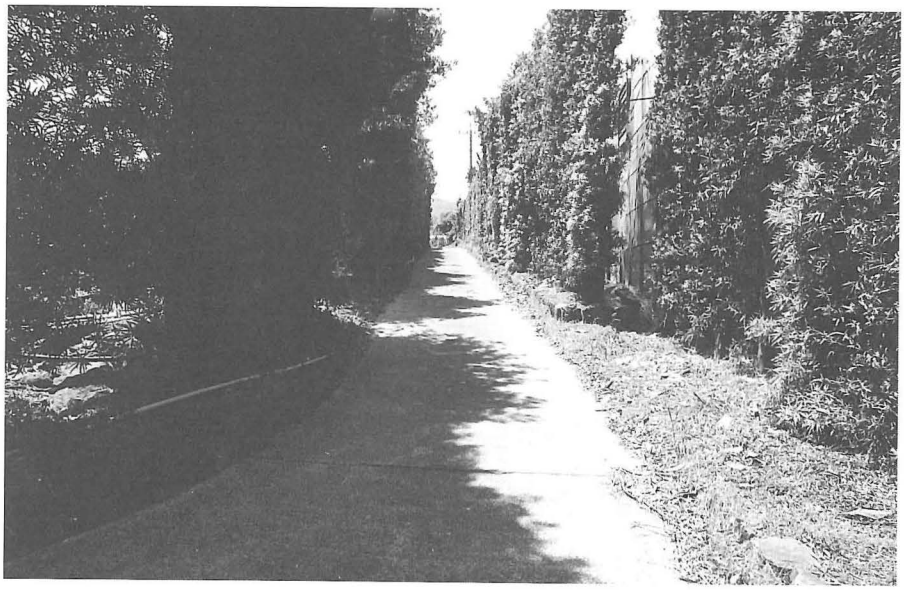
4．萩原博文　1985　「平戸市の文化財」20　―堤西牟田遺跡―　平戸市教育委員会

5．長与町教育委員会　1971　「堂崎遺跡」　長与町文化財調査報告第１集

6．寺田正剛ほか　「県内重要遺跡範囲確認調査報告書」II，長崎県文化財調査報告書第114集
長崎県教育委員会

図　　版

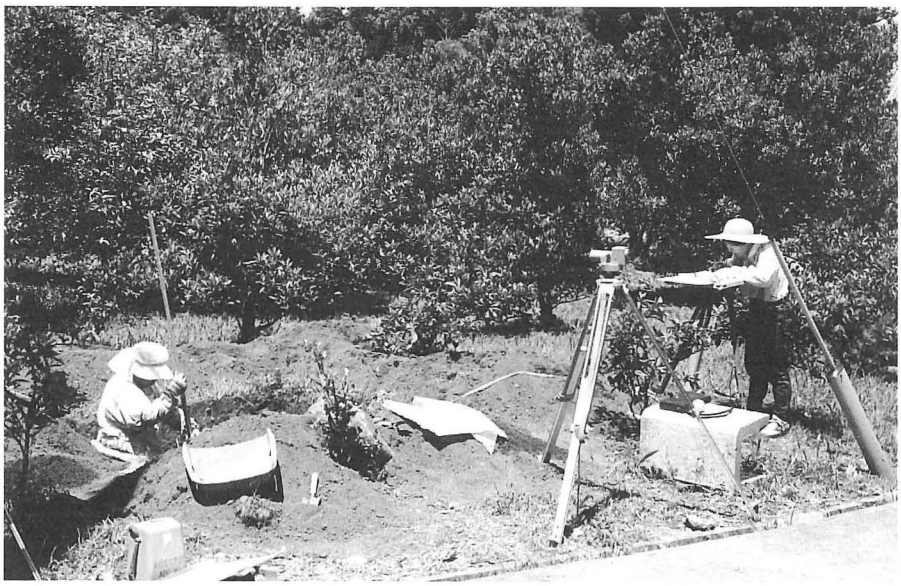
東側より堂崎半島を望む



A 地点近景

B 地点近景

図版 I　遺跡遠景・近景

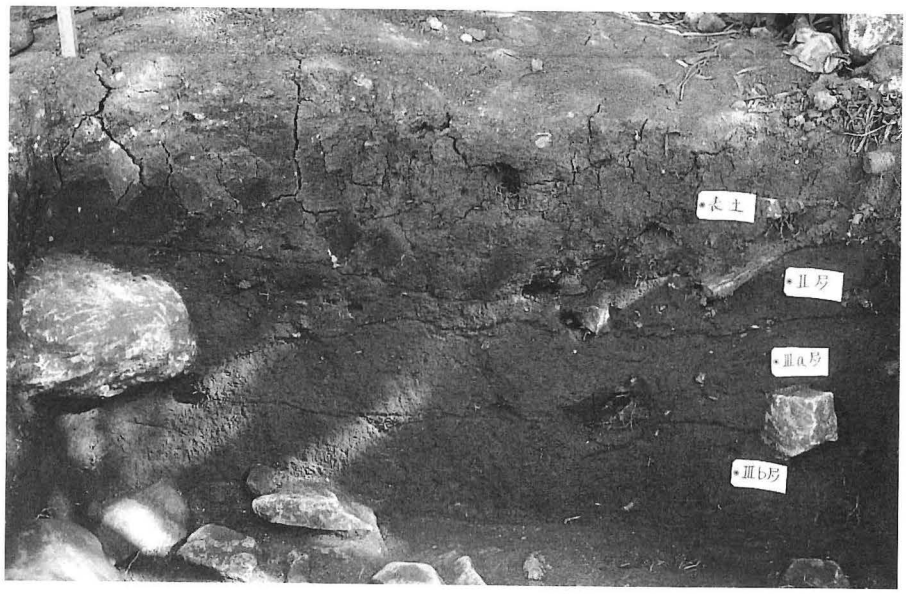


調査風景

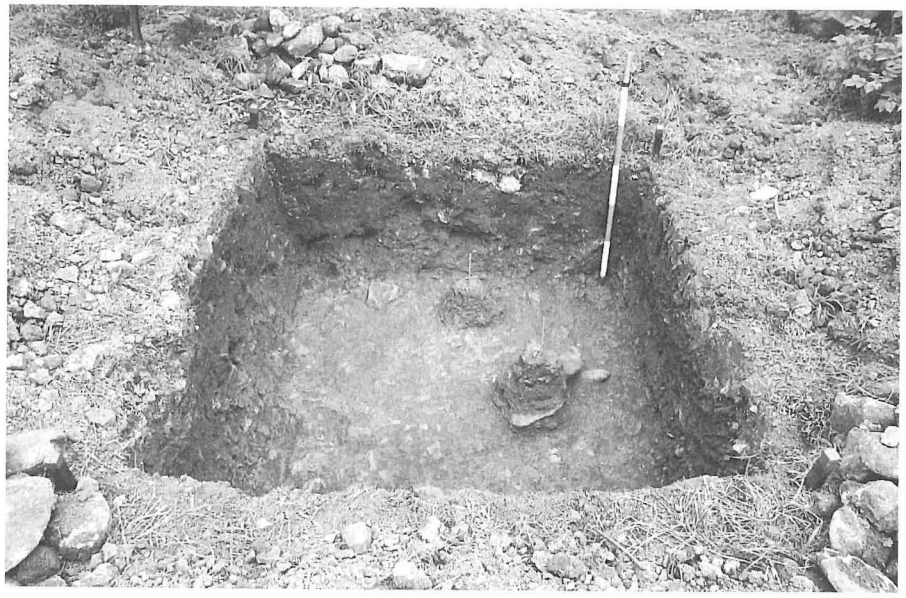
A 地点遺物出土状況

B 地点遺物出土状況

図版 2　調査状況及び A・B 地点遺物出土状況



図版 3　A 地点土層堆積状況

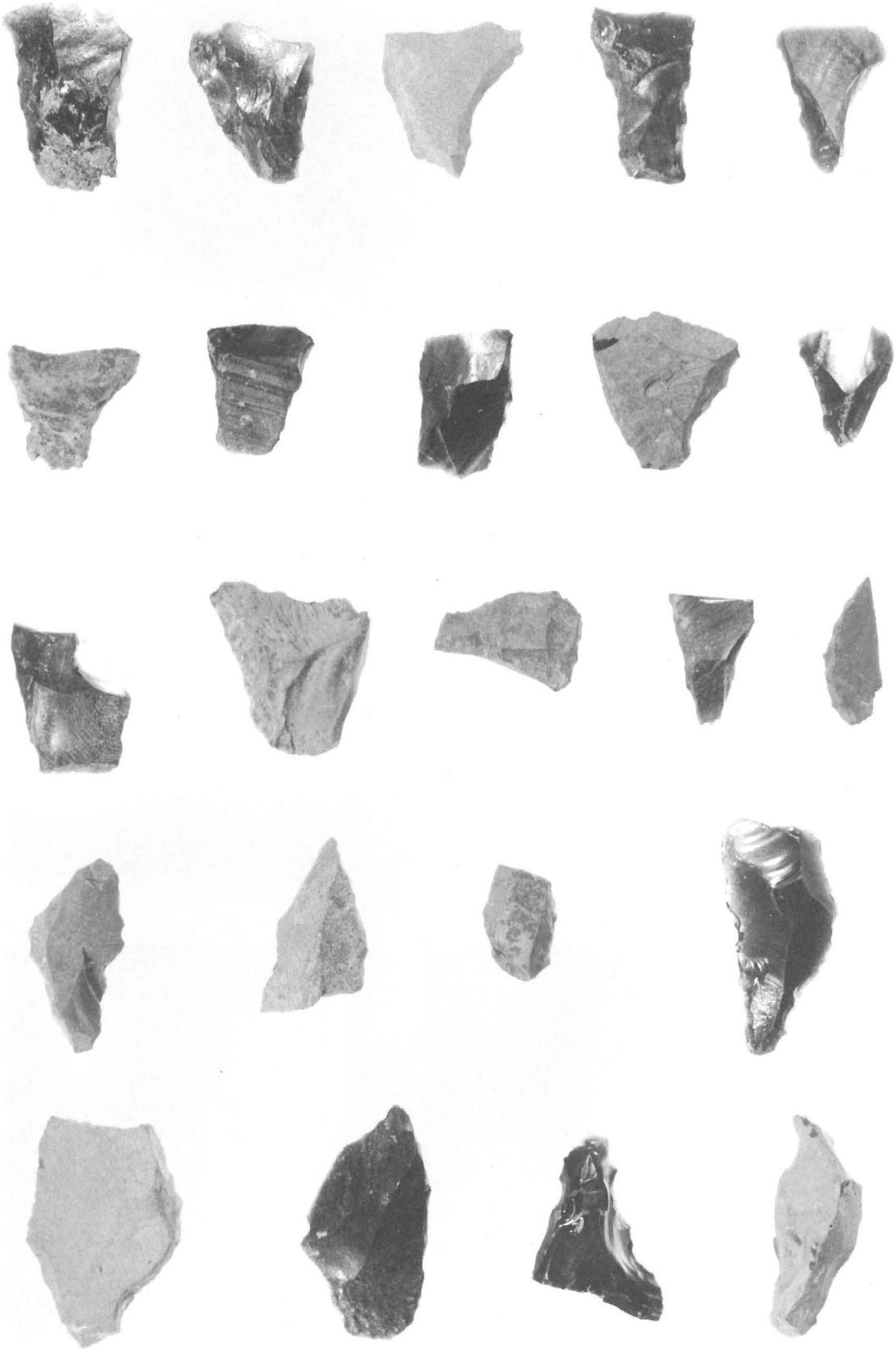


B地点試堀壙

3層下部石器出土状況

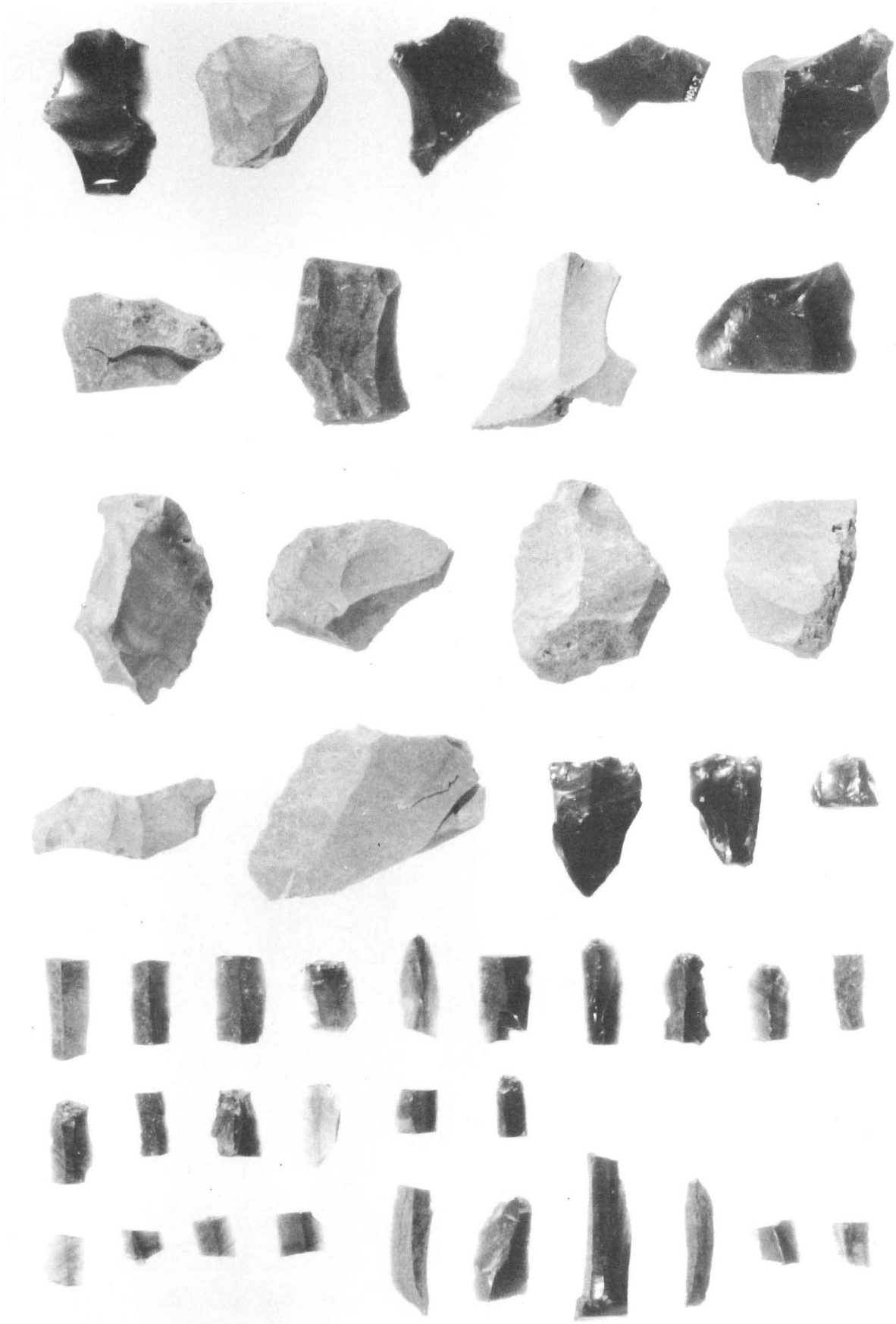
図版4　B地点土層堆積状況

図版 5　遺物出土状況

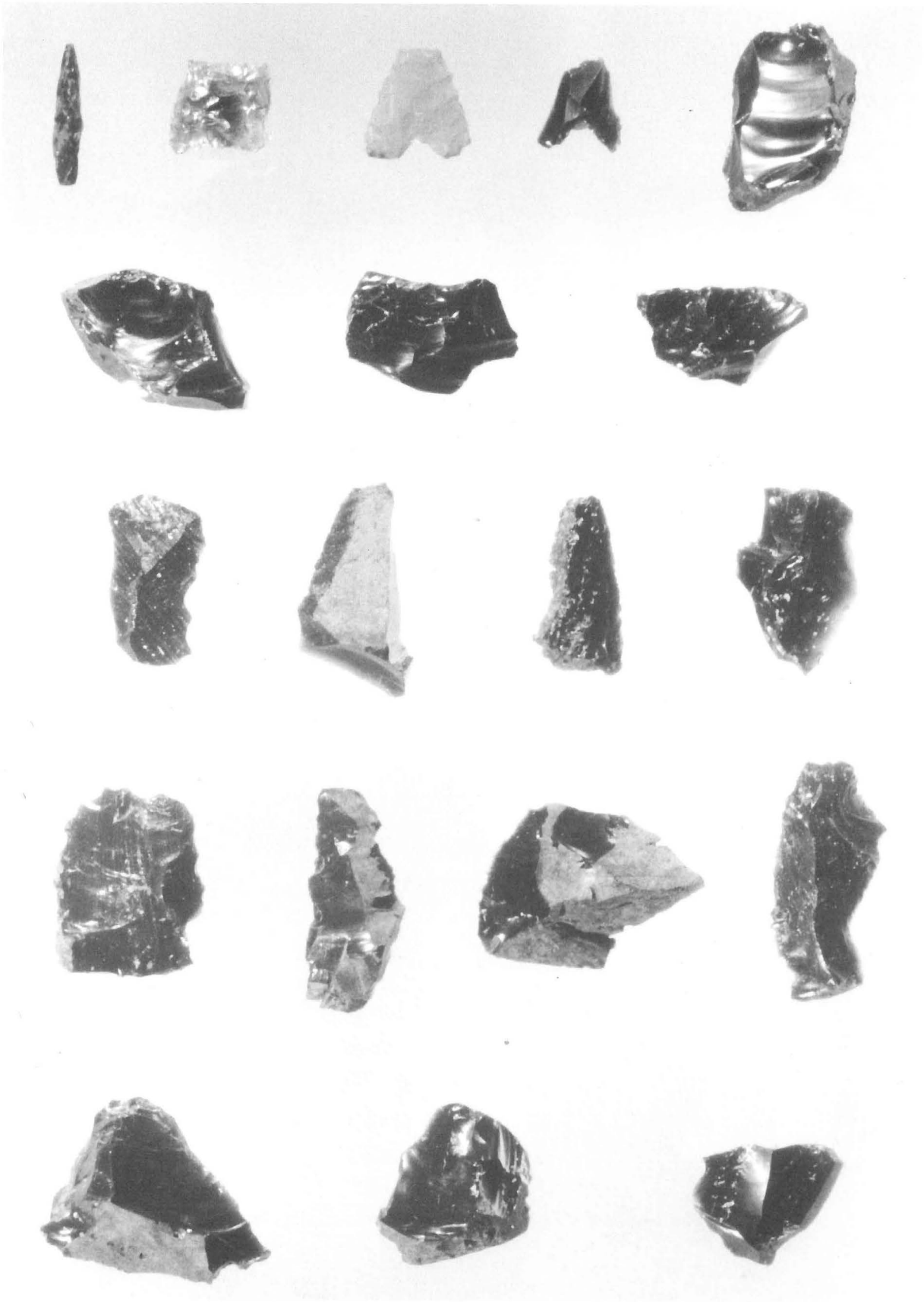


図版 6　旧石器時代の遺物

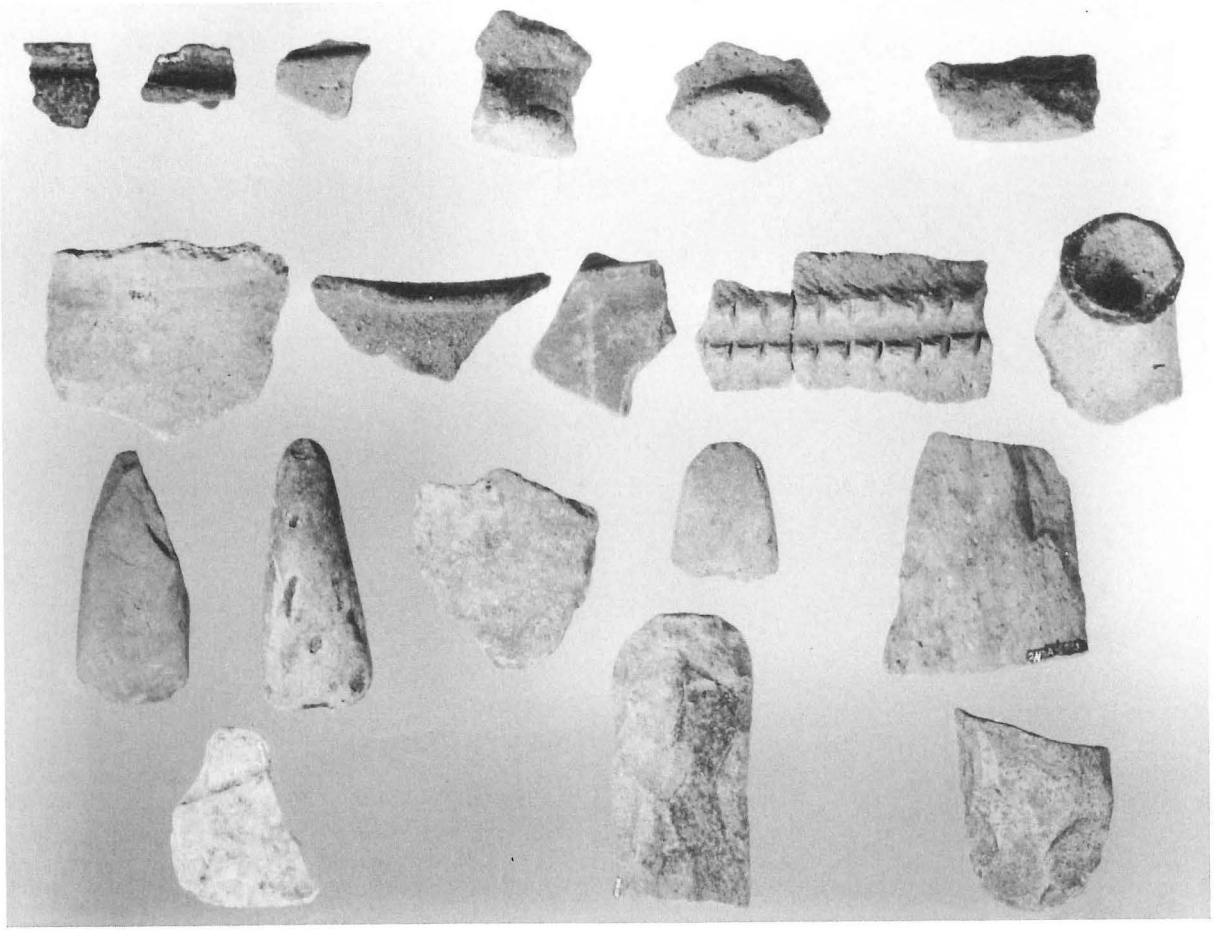
図版 7　旧石器時代の遺物



図版 8　旧石器時代の遺物



図版 9　縄文・弥生時代の遺物



図版10　縄文・弥生時代の遺物

長与町文化財調査報告書　第6集

堂崎遺跡

平成7年(1995) 3月31日発行

発行者　長与町教育委員会
長崎県西彼杵郡長与町嬉里郷659番地1
〒859-06　☎(0958)83—1111

印刷所　(株)昭和堂印刷
長崎県諫早市長野町1007—2
〒854　☎0957—22—6000